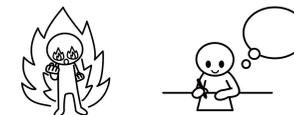


第5章 言語と心理

(1) 第二言語学習に影響する学習者の要因



：動機付け、性格、不安、年齢、**学習スタイル**、**認知スタイル**、言語適性など



：**学習環境**、学習時間など



<動機づけ> byガードナーとランバート(1972)

⇒ 第二言語が話されている国の文化を積極的に受け入れ、**その国の社会に参加したい**と望む

⇒ 社会的地位、就職など**目的を達成するための道具(手段)**とする
例) 日本の会社に就職するためにJLPT N2取得が必要

<動機づけ> byデシ(1985)

⇒ 学習そのものが楽しい、おもしろい、といった**内面から出る動機づけ**

⇒ 報酬、評価、など**外部から来る動機づけ**

例) JLPT N1を取得したら、会社から報酬がもらえる

<性格、不安>

自分に対する自信、**リスク・テイキング**、外向的か内向的か



<不安を感じている学生への対応>

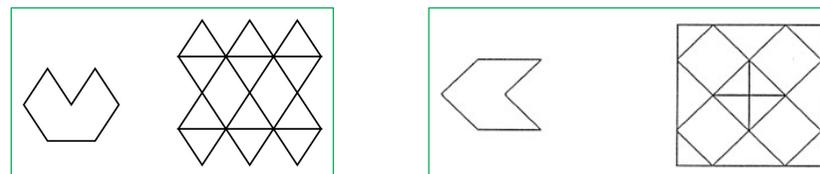
: 日記を通して、気持ちや考えを伝え合う

<認知スタイル>

物事を

するときの個人のスタイル

埋没図形テスト



<認知スタイル>

図形をすぐに見つけられた

: 周囲の環境に惑わされない

細部を全体から切り離して把握

に優れていて、

<認知スタイル>

なかなか図形を見つけられなかった

: 周囲の環境に影響されやすい

物事を**全体的**に捉える

に優れていて、

に積極的に参加

<言語適性>

をどの程度持っているか

代表的なテスト

Modern Language Atitude Test

①

⇒新しい音声を識別したり記憶できる能力

②

⇒文中における語の文法的な働きを認識する能力

<言語適性>

③

⇒文法規則などを帰納的に推測できる能力

④

[MLAT Sample Items](#)

by Psicología y Mente



リー・クロンバック (1916-2001)
アメリカの教育心理学者

(1957)

どんな
学習者の
によって異なる

が効果的かは、
(=言語適性、性格、認知スタイル、能力など)

(2) 学習者のストラテジー



コミュニケーションで問題が起きたときに学習者が使う方法

①

- ・自信がない語や文法の**使用を避ける**
- ・話したい内容の語がわからないとき、その話をするのを**あきらめる**



②

適切な語がわからないとき、

- ・他の語で**言い換える**
- ・知っている語を組み合わせで自分で**ことばを作り出す**
- ・その語の**説明**をする



③

母語の言い方を**直訳**したり、**母語をそのまま使う**

④

相手に助けを求める

例：「もう一回言ってください。」
「〇〇は〇〇語で何ですか？」



⑤

by レベッカ・オックスフォード

(学習の方法／工夫)

- ・ **目標言語に直接かかわるもの**
①**記憶** ②**認知** ③**補償**
- ・ **目標言語に直接には関わらないもの**
①**メタ認知** ②**情意** ③**社会的**

直接ストラテジー

① : 記憶するための工夫

例) ・

- ・ 単語カードの使用
- ・ 繰り返し復習
- ・ 動作をしながら覚える
- ・

(覚えたい語と音が似ている母語の言葉を関連付ける)



直接ストラテジー

② : 情報を整理して、理解を促すための工夫

例) ・

- ・ 重要な箇所に
- ・ 母語に訳す
- ・ 母語と比較する

= おおまかな内容をつかむ

= 欲しい情報だけをつかむ



直接ストラテジー

③ : 言語知識の不足を補う工夫

(コミュニケーション・ストラテジーと重なる)

例) ・ 知らない単語の意味を前後の文脈から推測

- ・ 他の単語で言い換え
- ・ 母語を直訳
- ・ ジェスチャー



間接ストラテジー

① : 自分の学習を自分で管理する工夫
(自分を客観視する)

例) ・

- ・ 学習が計画通りに進んでいるか確認
- ・ 自己評価



間接ストラテジー

② **感情**をコントロールする工夫

- 例) ・音楽を聴くなどして**不安**をなくそうとする
- ・「がんばれ」と口に出し、**自分を勇気づける**
 - ・**気分転換**をしてやる気を出す



間接ストラテジー

③ **人との交流**によって学習を進める方法

- 例) ・他の学習者と**SNS**で情報交換
- ・**友達**を作って話す機会を増やす



(3) 学習理論



学習観の変化

従来：教師主導型・知識伝達型の学習

近年：活動参加型の学習

重視



2つの理論を基に生まれた

- ・ (by レイヴとヴェンガー)
- ・ (by ヴィゴツキー)

『状況に埋め込まれた学習』 (1991) by レイヴ、ヴェンガー

「学習」とは、個人の頭の中で起こるものではない

していくことだ



レイヴとヴェンガーは に関心を持った
仕立て屋で働く新人の職人と共同生活を送り、
を観察



学習者はある共同体の中で、
初めは

として

周囲の助けを借りながら、

になっていく (=)



Legitimate peripheral participation

by Wikipedia



レフ・ヴィゴツキー (1896-1934)

- ・人間は、 (社会的相互作用) により、
自分の していく
- ・「学習」は社会とは切り離せないものである



by ヴィゴツキー

子供や学習者の**能力の領域**

- ① 問題が解決できる領域
- ② があれば解決できる領域
- (=)
- ↓
- The Zone of Proximal Development



(4) 言語と文化

by シューマン (1978)

- ・ **言語習得 =**
- ・ 目標言語の文化に、
という気持ちが強いほど、その**言語の習得が進む**

by ジャイルズ (1982)

話す相手との

によって、**話し方や言語を相手に近づけたり遠ざけたりする**

※第二言語学習者も、母語話者同士も



近づける場合 ()

- ・部長が若手社員と距離を縮めたくて、若者言葉を使う
- ・幼児に赤ちゃん言葉で話しかける

遠ざける場合 ()

- ・怒った時、急に丁寧な言葉遣いになる

(5) バイリンガリズム



： (個人が) 2言語を使用している状況

： **社会的に** 2言語を使用している状況

： 生後から2つの言語を**同時に習得**

： 1つの言語の習得が始まった後、**少し遅れて**2つ目の言語を習得

： 2言語を使用

どちらもある程度十分な言語能力がある

： 2言語で**4技能すべて**ができる

： 2言語を使用するが、
どちらも言語能力が不十分

2言語や、2つの言語スタイル(敬語とため口、標準語と方言)を

～例～

- ・両親の母語が異なるバイリンガルの子どもが、
父親とは父親の母語で、母親とは母親の母語で話す

<言語能力によるバイリンガルの分類>

- ：2言語の能力がほぼ均衡
どちらも流暢に使える人
- ：2言語の能力に差がある人
(一方の言語が優勢で、もう一方が劣勢)
- ：2言語どちらも言語能力が不十分な人
=ダブルリミテッド/セミリンガル

(1976) byカミンス

バイリンガルの子どもの言語能力と認知的発達の関係について

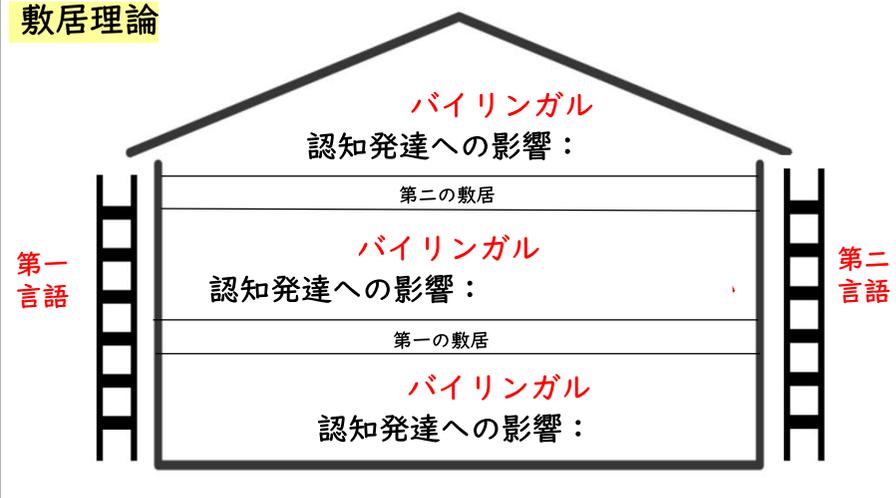
の子どもにバイリンガル教育を受けさせる

⇒

の子どもにバイリンガル教育を受けさせる

⇒

敷居理論



(1979) byカミンス

敷衍理論の考えをもとに立てた仮説

子供の第二言語の能力は、

- ・
 - ・
- ほど、発達しやすい

byカミンス

⇒ **日常生活** で必要な言語能力
年で身に付く

⇒ **学習** に必要な言語能力
身に付くまでに **年**かかる



／ 風船説 ／ SUPモデル

(1979) byカミンス

第一言語と第二言語、



／ 氷山説 ／ CUPモデル

(1981) byカミンス

第一言語と第二言語は、

(が含まれる)



<バイリンガル教育>



①

⇒ **言語的に多数派**の生徒が、教科の一部または全部を
少数派の言語で学ぶ

※1965年、**カナダ**の学校で、英語を母語とする子供が
一部の教科を**フランス語**で受けたのが始まり



イマージョン教育の分類

●第二言語の使用比率による分類

イマージョン：**すべての教科**を第二言語で行う

イマージョン：**一部の教科のみ**第二言語で行う

イマージョン教育の分類

●開始時期による分類

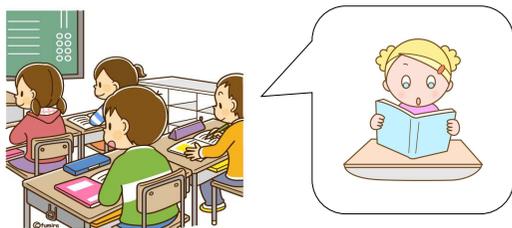
イマージョン：幼稚園の年長組または小1から

イマージョン：9～10歳くらいから

イマージョン：11～12歳くらいから

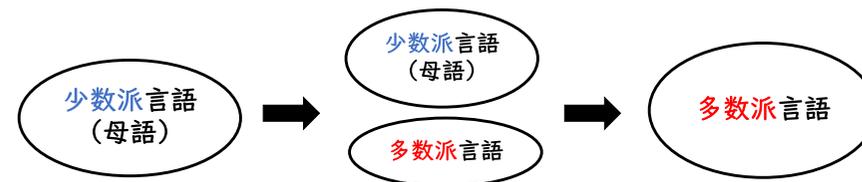
②

⇒ 言語的に少数派の生徒が、多数派の言語の授業に入る

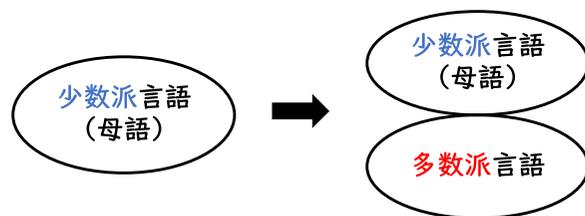


③

⇒ 家庭で使う少数派言語から、社会的に優勢な多数派言語へ移行させる

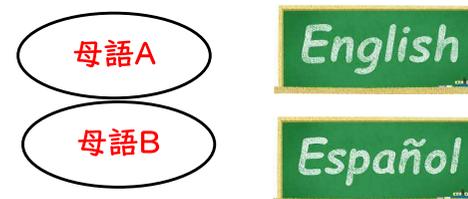


④

⇒ 家庭で使う少数派言語を維持しつつ
多数派言語を習得する

⑤

- ・ 2つの異なる言語を母語とする生徒がほぼ同数いる学校
- ・ 教科の半分を一方の言語で、もう半分を他方の言語で受ける



⇒ 第二言語を習得する過程で…

- ・ 母語を失う
- ・ 母国に対する誇りを失う
- ・ アイデンティティを失う
- ・ 学力低下



⇒ 第二言語を習得しつつ、母語も使い続ける

母語の発達・アイデンティティ・学力が犠牲にならない

新たな価値が加わった状態



< 年少者への日本語教育の現状 >



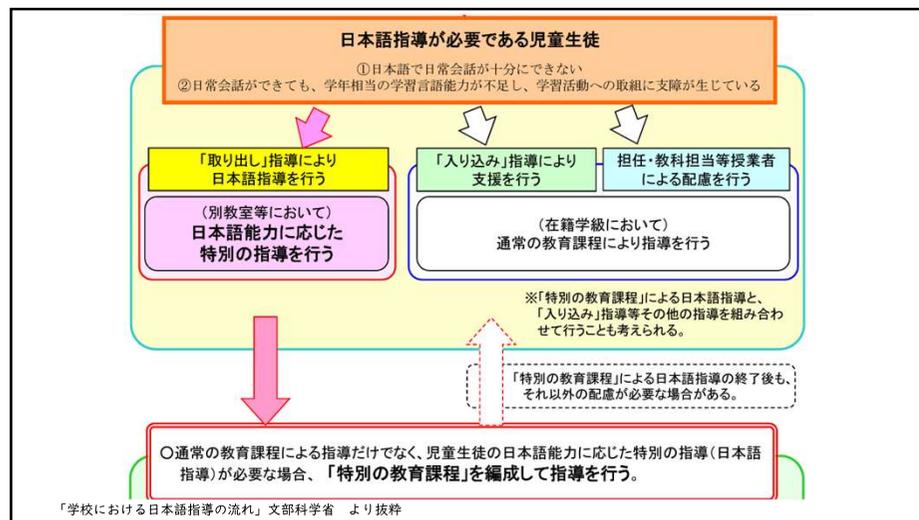
< 日本語能力 評価ツール >

(文部科学省)

⇒ 日本語能力を把握し、指導方針を決定



※ 日常会話はできるが、教科の学習が困難な児童が対象



<外国人児童への日本語教育>



⇒ **教室に日本語指導者が入り込んで、生徒のそばで、授業内容を翻訳・解説**

※ **日本語指導担当教員は、**

<外国人児童への日本語教育>

⇒ **教科の時間(または放課後)に別の教室で日本語の授業を行う**

・ **として編成・実施**



・ **授業時間数は、(※標準は、週8時間)**

・ **在籍学校に日本語指導教員がない場合、近隣の学校の日本語学級に定期的に通う()**

<「特別の教育課程」による日本語指導の例>

【指導期間の目安】

~3か月

~6か月

6か月~1年

1年~1年6か月

1年6か月~2年

2年~

【日本語指導の内容例】

サバイバル日本語 →挨拶や体調を伝える言葉、教科名や身の回りの物の名前などを知って使えるようにする。

日本語の基礎(文字・表記・語彙・文法)
→発音の練習、文字の習得、語彙を増やす、簡単な文型を学ぶ
学校への適応や教科学習に参加するための基礎的な力をつける。

技能別の学習(「聞く」「話す」「読む」「書く」活動)
→4技能のうちどれかに焦点を絞って学習する。
例えば、読解や作文の学習に重点をおいて学ぶなどが考えられる。

日本語と教科の統合学習(JSLカリキュラム)
→教科の学習内容を理解すること、日本語を学ぶことを組み合わせて学習する。

教科の補充
→在籍学級での学習内容を、先行的や復習的に学習する。

日本語指導が必要な児童生徒に対する「特別の教育課程」の在り方等について
文部科学省初等中等教育局国際教育課
3. 「特別の教育課程」による日本語指導を行う対象児童生徒と指導内容(案)より抜粋

20

<小・中学校での日本語指導>

(文部科学省)

- ・ を統合的に行う
- ・ 将来的に、 が目的
- ・ に基づいて教科の内容の理解を測る

<小・中学校での日本語指導>

「JSLカリキュラム」の種類

- ① : 日本語で学習課題について **グループ活動** を行う
各教科に を育成
体験(自己体験を話す)⇒探求(他の生徒と一緒に調べる)⇒発信(発表)
- ② : **各教科**の学ぶ力を育成